

Title	節間の結合度と文法化 : (間)主観性の観点から
Author(s)	米倉, よう子
Citation	Osaka Literary Review. 47 P.1-P.18
Issue Date	2008-12-24
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25316
DOI	10.18910/25316
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

節間の結合度と文法化： (間) 主観性の観点から

米倉 よう子

1. はじめに

Hopper and Traugott (2003) は節間の接続関係について、coordination 対 subordination という従来の二分法ではなく、(1) に示すように、各々の節の依存度 ([+/-dependent]) と埋め込み度 ([+/-embedded]) を基準とした連続的な3段階の分類を示した。

(1) parataxis	>	hypotaxis	>	subordination
[-dependent]		[+dependent]		[+dependent]
[-embedded]		[-embedded]		[+embedded]

(Hopper and Traugott 2003: 178)

二つの節の融合度は、(1) のクラインの左極位置 (すなわち parataxis) において最も低く、右極位置 (すなわち subordination) において最も高いとされる。しかし、このような一方向的な発達ばかりが実際に観察されるわけではない。節間の連結は、複数の出来事間の関係をどのように認知的に解釈するかに関わる問題である。その具体例として、本稿では日本語接続助詞「ば」の文法化を中心に考察してみよう。

2. 共通参与者項の存在

古典語では接続助詞「ば」の用法は、接続する活用変化形により区別されていた。すなわち仮定条件「ば」用法は未然形接続、確定条件「ば」用法は已然形接続である。具体例をあげよう。

(2) a. [未然形接続]

即ち其の水門みなとの蒲かまのはな黄を取り、敷き散して其の上に輾こいまろ転ばば、汝が身もと、本の膚いの如く必ず差えむ

(『古事記』(712年)上 (pp.78-79))

b. [已然形接続]

故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷たつひに取り成し、亦、劍の刃に取り成しき。

(『古事記』(712年)上 (p.109))

その後、未然形接続「ば」は次第に廃れ、これが表していた仮定条件用法は已然形接続「ば」に受け継がれていく。未然形接続「ば」が減少し始めた時期は、Ohori (1998: 141) によると、16世紀であるという。

Ohori (1994) では接続助詞「ば」の通時的発達が、同じく節連結機能を持つ接続助詞「て」の発達と比較されつつ、分析されている。「節連結機能」という同一の機能ラベリングを受ける古代語の「て」と「ば」であるが、基本的に「て」は同じ主語を持つ節どうしを結びつけ、「ば」は異なる主語を持つ節どうしを結び付けるという違いがあった。たとえば (2b) の「ば」例では、「相手に手を取らせた」のは建御雷神たけみかずちのかみであるが、それを「氷柱や劍の刃たけみなかたのかみに変えた」のは建御名方神という別人である。また、『古事記』のこの場面の少し後の場面では「て」使用文 (3) が見つかるが、ここでは「追いかけて迫り着いて」いった人物と「(相手)を殺そう」とした人物は、両方とも建御雷神たけみかずちのかみである。

- (3) 故、追ひ住きて、科野国しのくにの州羽海すはのうみに迫め到りて、殺さむとせし時に建御名方神たけみなかたのかみの白まをしく、(…)

(『古事記』(712年)上 (pp.109-110))

以上の「て」と「ば」の違いは連結節の統合度の差に帰されうる。すなわち、「て」では連結節の結びつきが強いので、両節の共有項 (argument) が少なくとも一つは存在しなければならない。「ば」の場合は節間の統合度が緩く、そのような制約が存在しない。その結果、「ば」では異なる主語をもつ節どうしが結び付けられても構わないというわけである。

その後、「ば」でも次第に節間の統合度が高まり、同一主語を共有すると考えられる節どうしを結びつける例の割合が徐々に増加する様子が、Ohori (1994) の調査による (4) からも見取れる。

(4)	(%)	『竹取物語』	『平家物語』	『御伽草紙』
SS「ば」		8	18	31
DS「ば」		92	82	69

(SS = Same Subject, DS = Different Subject)

(Ohori (1994: 137) に基づく)

このような「共通の参与者項の有無」は、「既決定性 (predetermination) の有無」に還元される。「既決定性」とは、複数の節が連結される場合に、より依存的な節で表される情報のうち、明示的に表されなくても復元が可能なものは省略してよいというものである。Cristofaro (2003: §5.3.2) は、節間の統合度を高める要因の一つとして、この既決定性をあげている。

既決定性の有無という観点から見ると、はじめは共通の主語を取らなかった「ば」は次第に節結合機能が高まった結果、共通の主語項を持つことが可能になったと判断できる。節の統合度が強化されることになるこの変化の流れは、(1) にあげたクラインにも合致する。しかし本稿では、節間の統合度を決定する要因は他にもあること、および節間の統合度と文法化の進行度は常に比例関係にあるわけではないことを以下で考察していく。

3. トピック性と条件

前節で述べたように、接続助詞「ば」は古代語では、仮定条件「ば」は未然形接続、確定条件「ば」は已然形接続という具合に、接続する活用形による用法の使い分けが存在していた。では、接続する活用形による用法の差異を超えた上位スキーマ的な「ば」の意味はないのだろうか。Ohori (1998: 143-144) によると、それは「トピック打ち立て (topic-setting)」機能であるという。現代日本語で典型的なトピックマーキング助詞としては「は」がよ

くあげられるが、確かに (5) にあげる「ば」は、「は」で言いかえ可能である。

(5) あの先生**ってば**、かなりの変人だよ。'

cf. あの先生**は**かなりの変人だよ。

トピック (topic) は言語学において、「場面設定的 (scene-setting)」表現とも定義されてきた。たとえば Chafe (1976) は、トピックとは "a spatial, temporal or individual framework within which the main predication holds" を設定する要素であるとしている。一方、「ば」でマークされる条件節は、後続節を理解するためのバックグラウンド的情報を聞き手に提供していると考えられ、この点でトピック的であるといえる。また、どの言語においても条件節は語順的に結果節に先行するのが普通であるが (Greenberg 1966: 111)、「前提 (premise) > 結論 (conclusion)」という語順は、「後続節を理解するためのバックグラウンドの情報提示としての条件節」を想定すれば、論理的必然性がある。さらに、文頭はトピック要素がよく現れる位置なので、この事実をもって Haiman (1978) は「条件節はトピック的」と主張している。このように考えると、接続助詞「ば」の上位スキーマ的な意味は「トピック打ち立て (topic-setting)」機能であるという主張は、妥当に思われる。

4. 時間的連続性からの拡張

「接続助詞「ば」のスキーマ的概念はトピック打ち立て機能である」というとき、「トピック打ち立て」とは、後続節解釈の助けとなるバックグラウンド的情報を「ば」節が提示することを意味しており、その点で「ば」の後続節は「ば」節に依存的である。ただし、「依存的」と一口にいても、「ば」節と後続節との意味関係は、「ば」の用法によりさまざまである。たとえば (6) では、「ば」を介して連結される節間に時間的連続性 (temporal sequence) が存在しているという解釈が可能だが、時間的に前後して二つの出来事が起こったことは多分に偶然の産物にすぎないとも考えられ、これらの節間に強

力な意味的統合性があるとは必ずしもいえない。

- (6) さるに、十二月ばかりに、とみのこととて御文あり。おどろきて
見れば歌あり。 (『伊勢物語』(10C 前) 第 84 段 (p.188))

一方、(7) では、男がなぜ歌を詠んだのかという背景 (=理由) が「ば」
マーキング節で表されている。

- (7) むかし、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、
つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを
(『伊勢物語』(10C 前) 第 125 段 (p.216))

二つの節により表される出来事間に因果関係が認められる因果用法のほうが、
時間的連続用法よりも意味的統合度は高い。そもそも人間は、世界で起こる
出来事に関して、因果関係の見地からその解釈を体系化したがる傾向がある
ことが分かっている。たとえば Abbott and Black (1986) は、人は出来事を
単に時間的前後関係のあるものとして覚えるよりも、因果関係のある一連の
出来事として覚えるほうが得意であることを例証している。時間的連続用法
「ば」から因果用法「ば」が発生したことは、上記のような人間の傾向を反
映する。

時間的連続用法、因果用法に加えて、Ohori (1998) には「ば」の恒常確
定条件用法 (dispositional usage) があげられている。「恒常的 (dispositional)」
とは、あるイベントが他のイベントをだいたいにおいて発生させる性質があ
ることを意味する。この用法は、時間的連続用法とも因果用法とも関連があ
る。ただし、時間的連続用法ほど時間概念が中心的役割を果たすわけではな
く、また因果用法ほど因果関係が重視されるわけでもない (Ohori 1998: 148)。

(8) に具体例をあげておく。

- (8) a. 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲ほゆ

(『万葉集』(8C 後) 802)

- b. 憑物の本意をせんとて、女姿にて怒りぬれば、見所似合はず。女
がかりを本意にすれば、憑物の道理なし。

(『風姿花伝』(1400-02 頃) 第二 物学条々・物狂 (p.224))
恒常的な一般論理を表す「ば」は、慣用句・ことわざといった社会の所産とも言える表現に多く見出すことが出来る。

- (9) a. 打てば響く
b. 風が吹けば桶屋が儲かる

さらに「ば」には、以下のような別種の用例もある。

- (10)a. 錆は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける

(『平家物語』(13C 前) 第 11 卷・那須与一 (p.360))

- b. 夫が犬を飼いたいと言え、妻は猫が飼いたいと言う。

このような「ば」を、「対称 (symmetrical) 読み」の「ば」と呼ぶことにしよう。ここで用語の整理をしておきたい。Ohori (1998) では、対称読み「ば」の例として、英語でいうと "and ... as well" のようにグロスが付けられる (11) のような例があげられている。

- (11) 彼は足も速ければ、肩も強い。 (Ohori 1998: 136)

一方、森田 (2002) では、(11) のような例は「並列」を表す「ば」として分類されている。Ohori (1998) が (11) を「対称読み」と名づけたのは、「足も速ければ、肩も強い」のように、前節と後節が表層的に同じ文構造をとりうることを考慮してのことだろう。Ohori (1998) および森田 (2002) といった先行研究の読者の理解の混乱を避けるために、本稿では (10) を「対称読み」、(11) を「並列読み」の例として名称的に区別するが、この二つの用法はいずれも、同時に成り立つ事態を前節・後節の形で「列挙する機能」を持っている点で共通しており、機能的にはさほど差はないと考えてよい。

このような列挙機能を持つ「ば」はどのように発生したのだろうか。Ohori (1998: 153) には、「(「ば」の) 対称読み (=本稿の「並列読み」にあたる) の発生は、トピック性 (topicality) の強化と、それに伴う連続性 (sequentiality) の緩み (loosening) が原因かもしれない」という記述が見ら

れるのだが、「相対的にトピック性が強化されると対称読みが可能になる」という主張について検討してみよう。日本語においてトピックをマークする代表的な助詞として論じられてきたのは、「は」である。そして、その「は」の説明には、「対比」という概念がしばしば関わってきた (cf. 浅利 (2008))。たとえば Shibatani (1991: 96) は、「は」は「強調的判断 (emphatic judgement)」に関わるとし、たとえば (12) のように、トピック文が対照性 (contrast) を備える文脈に現れる場合にとりわけ「強調的判断」が際立つと述べている。

(12) 兄は医者で、弟は役人だ。

一方、対照性がそれほど明らかでない文脈で使用された場合、トピック文は「日は昇る」「ヒトは不死ではない」のように、カテゴリー判断 (categorical judgment) を表すことになるが、その場合の「は」もやはり本質的には対照性を備えているという。というのは、「は」によりマークされるものは他の可能な候補から選ばれたという意味で、本来「比較対照」の性質を持っているからである (Shibatani 1991: 97)。

助詞「は」の機能を説明するのに対照性・対比性概念を持ち出す問題点については浅利 (2008) が詳しいが、その点について詳しく論じるのはここでは避け、ひとまず、トピックを打ち立てる際には「対比される」という行為が絡んでいるものと仮定してみよう。

「対比性 (contrast)」は「対称性 (symmetry)」と関連しうる。ある構造に対称性が存在していることを判断するには、たとえば鏡像対称性を見出すには、鏡に映った像と元の像を対比させることが必要となる。すると、「トピック打ちたて機能」と「対称性」の間に共通点が見出されることになる。「トピック打ち立て機能」は「対比」概念と関わりが深いとされており、一方で「対称性」が認識される際には「対比される」ことが前提となるからである。このように考えると、「相対的にトピック性が強化されると対称読みが可能になる」と Ohori (1998) が主張した理由が見えてくる。すなわち、

「トピック性 (トピック打ち立て機能) 強化」が「対比性」強化につながると仮定するならば、「ば」の発達において、「トピック性強化」が「対比」を前提とする「対称」用法発生の引き金になったのだらうと考えるわけである。実際、Ohori (1998) では、対称読み (= 本稿で言う「並列読み」)「ば」の発生について、以下のような説明がなされている。

- (13) (...) the contrastive aspect of topicality is highlighted and the symmetrical interpretation is obtained. (Ohori 1998: 153)

確かに、「後続節を解釈する際のバックグラウンド的情報を先行節が提示する」という意味において、接続助詞「ば」には「トピック打ち立て機能」とでもいうべきものが備わっている。数ある「ば」用法の中でも、典型的なトピック打ち立て機能を果たしていると考えられる「A と言えば、～」のような「ば」用例では、「トピックの取り立て」の結果として対比効果が発生することもあるのかもしれない。しかしそうだとすると、ここから対称読みを発達させるには、「ば」を挟んで存在する先行節と後続節の間に、「対称性」につながっていく「対比性」が存在していると言わなければならない。すなわち、「ば」マーキング節とその後続節の間に「対比関係」が存在し、それが強調されているのであれば、そこから対称用法が発生したと考えるのは可能であろうが、実際に「A と言えば、～」形式で観察されるのは、「ば」が連結する二つの節間の対比性の強調などではなく、あくまで「ば」マーキング節が後続節による内容提示のためのお膳立てをしているということではあるまいか。「A と言えば、～」形式に「対比性」が存在しているとしても、それは「A」と「A以外のもの」の選択に関わるものであり、「ば」により接続される二つの節間に「対比性」が存在しているのではない。

以上のように考えると、「トピック性強化に由来する対比性の強化」の結果として列挙機能をもつ「ば」用法が誕生したとするのは無理があるようだ。それでは、対称読みや並列読み「ば」の発生はどのように説明すればよいのだろうか。その解決のための手がかりもまた、Ohori (1998: 153) に記され

ている。すなわち、「連続性 (sequentiality) の緩み (loosening)」という考え方である。しかし「連続性の緩み」とはいかなるものか、Ohori (1998) では詳しく述べられていない。そこで、この点について次節で検討することにしよう。

5. 連結度の緩みと主観化強化

複数の出来事をつなぐ意味の関係には単なる時間的連続性から原因理由、事物の恒常性、さらには対称性までもが包含されうる。「ば」の対称読みでは、接続助詞によりつながれる節の意味内容の間に明らかな時間的連続性ないし因果性があるわけではないことに注意したい。この傾向は、対称読み「ば」だけでなく、並列読み「ば」例においても顕著である。

(14) a. この店は国産もあれば、輸入品もある。

b. 彼は英語もできれば、中国語もできる。

並列読みでは、「ば」により接続される節の意味内容どうしはそれ自体では大した連関はない。たとえば (14a) では、国産品があることが、輸入品もあるという事態を引き起こしているわけではない。(14) では話し手の信念のみによって節どうしが関連付けられ、列挙されていると言っても過言ではない。これは主観化 (subjectification) 強化の例として扱うのが妥当であるように思われる。

ここで、節間の連結度合いと主観化強化の関係について、「ば」以外の例を少し見ておこう。「が」「ほどに」が格助詞から接続助詞へと発達する過程でも、主観化強化に向かう流れが見られることが、竹内 (2007) で報告されている。格助詞段階の「が」「ほどに」では、それに前後する節の意味内容は時間的・場所的に関係づけられていたり、ともに同じ出来事参与者についての属性を述べていたりする。接続助詞化した段階でも、初めのころは接続助詞によりつながれる節どうしは依然として時間・場所的に関係付けられていたり、あるいは共に同じ出来事参与者についての属性を述べていたりする。

ところが一方で、次のような接続助詞例も見られるようになっていく。

- (15) a. おのれは風呂に唯ひとりあると言うたが、この群集は常より多い
 は何ごとぞ (『エソポのハプラス』 p.417; 竹内 2007: 176)
- b. 若君はいとうつくしうて、され走りおはしたり。(源氏)「久しき
 ほどに忘れぬこそあはれなれ」とて膝に据ゑたまへる御気色、忍
 びがたげなり。 (『源氏物語』(1001-14年頃) 須磨 (p.164))

(15) の「が」「ほどに」により接続される節の意味内容には、時間・場所的な関係が希薄である。また、これらの節はそれぞれ共通の出来事参与者について叙述しているのでもない。すなわち、二つの節の表す意味内容につながりがあると話す手の見方だけに基づいて、これらの接続助詞が使用されていることになる。

さらに竹内 (2007: 177) は、「が」「ほどに」の発達において、節の埋め込み度合いが浅くなったことが格助詞から接続助詞へのシフトを可能にしたとの指摘を行っている。節の埋め込み度合いが浅くなるというのは、(1) で見た *parataxis* > *hypotaxis* > *subordination* というクラインによって必然的に含意される、節の埋め込み度を強化する方向に向かう一方向仮説に反するようと思われる。実際、反例となりそうなケースを取り扱った Higashiizumi (2006) のような先行研究もある。Higashiizumi (2006) では、日本語「から」の現れる環境が、従属節構造から独立節構造へと広がっていることが論じられている。² 接続助詞「ば」の発達に話を戻すと、対称読み「ば」の発生も、Ohori (1998) が主張するように、前節と後節間の「連続性の緩み」が引き金になったとすると、これは節間の結束性を強める方向へ進むはずの (1) のクラインに逆行していることになる。

ところが一方で、このような一連の発達の動きは「より主観性を強める方向へ発達する」という Traugott (1989) の主張には沿っているのである。接続助詞「ば」では、トピック性が強調された結果、因果関係や時間的連続関係といった意味要因に頼っていた前節と後節との連結が弱まったが、それに

代わって、話し手の信念や捉え方に基づいて節どうしを結びつける流れが強まった。ここに、「ば」の並列・対称読み用法が発生する余地があったのではないかと思われる。

6. 後続節を持たない「ば」

ここまで「ば」の前後にそれぞれ節が存在しているケース、すなわち「ば」が節と節とを連結しているケースをみてきたが、明示的な後続節を持たない「ば」の用法もある。例えば次の言いさし表現では、後続節は非明示的なままにされている。この例では、話し手の無念さ、遺憾の念といった、心的態度の表出が認められる。

- (16) (外出先で雨に降られて後悔して) 家を出るときに折り畳み傘でもカバンに放り込んでおけば。

このような「ば」用法を心情読み「ば」と呼ぶことにしよう。「ば」に限らず、言いさし構造では、大なり小なり話し手の心的態度が表出されることが多いようだ (cf. 本多 (2001: 157))。「接続」という機能は単に論理的なものでなく、どうつなぐかという点で話し手の心情と深く関わる。そこに、接続助詞が話し手の心的態度を表す終助詞へと踏み出す意味的契機があったことは間違いない。

一方で、明示的な後続節を伴わない「ば」例には、聞き手の共感を得ようとする次のようなものもある。

- (17) (絶版になった本を店頭にて繰り返し注文しようとする客に困った店員が) その本はもう絶版なんですってば。

また、(18) にあげる「ば」例では後続節らしきものが一応、明示的に現れてはいるが、直感的には (17) で見た後続節なしの共感を求める「ば」例に近い。

- (18) 俺だってば、俺。

Ohori (1998: 136) は (18) を「強調的トピック (emphatic topic)」を表す

「ば」用法とし、英語 if にはこのような用法はないとしている。強調的トピック用法「ば」は、聞き手の共感を求める働きが感じられるという点で、機能的には例 (17) の「ば」に近いのではないかと思われる。また、両用法ともに「ば」の前に「って」が置かれる点でも共通点がある。そこで、本稿では両者をひとくくりにして、強調読み「ば」と称することにしよう。

心情読み「ば」や強調読み「ば」の発生は、「ば」節が持つ「(トピック打ち立て機能に由来する) トピック性」に還元して説明することが可能である。まず、(16) や (17) のような、後続節を持たない「ば」のケースから考えてみよう。トピック打ち立て機能としての「ば」節は本来、後続節を理解するためのバックグラウンド的情報を提示するためのもので、後続節なしで単独で使用されても意味を成さないはずである。それをあえて単独で使用することは、「ば」節が表す内容自体に内在的に伝達の対象となるだけの特別な価値があると聞き手に主張することにつながる (cf. 大堀 1996)。同じように、「俺だってば、俺」のように、「A だと言え、A」という、論理的に同語反復的な発話は、期待される情報量を明らかに満たしていない。にもかかわらず、我々がこうした発話を日常的に行うのは、それが命題に対する話し手の心的態度の前景化機能や聞き手の共感を促す機能という、別の効果を生じさせるからである。

このように考えると、心情読み「ば」や強調読み「ば」用法は、もとを辿ればトピック打ち立て機能に由来するといえ、条件節 (conditional) がトピック概念と高い親和性をもっているとする Haiman (1978) の主張をサポートする事例であるように思われる。ところが、条件節とトピック性の親密さに疑いの目を向けた先行研究も存在する。近代英語における条件接続詞 if の発達を Lampeter Corpus (=1640 年から 1740 年に出版された近代英語テキストを集めたコーパス) に基づいて調べた Claridge (2007) は、例えば (19) に現れる if 節は、トピック性を帯びているというよりは、問題となっている命題についていろいろな議論があるということを表す機能を果たしている

と主張する。

- (19) The great Advantages of the Vienna Treaty were formerly supposed to lye on the Side of the Emperor; and **if Spain had any Expectations of establishing the Succession of Don Carlos by an Union with the Emperor**, They found Themselves disappointed: (...) We may believe the Considerer, Spain was so far from having any reasonable Expectations of this Nature

(PolA 1731; Claridge 2007: 237)

Claridge (2007) は、「条件的トピック節 (conditional topic clause)」という考え方はトピックという概念をあまりに広義に捉えすぎているとして、Haiman (1978) を批判する。Haiman (1978) は、(条件的トピックも含めて、ピックは先行文脈によってだけでなく、話し手と聞き手の間に成り立つその場限りの合意によっても打ち立てられうると主張した。それに対して Claridge (2007) は、例 (19) では話し手と聞き手の間に「合意」が存在しているどころか、if 節で表されている命題に関してはさまざまな議論があるという「不確定性 (uncertainty)」が存在しているだけだと主張する。Claridge の主張に基づき、if 節に「不確定性」を結びつけると、(20) のように間接疑問文で whether の代わりに if が使用されうること事実をうまく説明することができる。

- (20) When I asked him **if** it was as good as a commercial conference he said that he thought so.

if 節で提示される命題を受容するという選択肢も、拒絶することも選択肢も聞き手には用意されていると Claridge (2007: 239) は指摘する。このように if 節で提示される命題内容の取り扱いについて聞き手に選択肢を与えることは、極性疑問文 (polar question) を使用する場合といくつか類似点がある。まず、どの言語においても一般に疑問文は聞き手を会話 (談話) に巻き込むきっかけを提供しやすいことが知られている (Herring 1991: 259)。したがっ

て、if条件節を用いることは、疑問文の使用時と同じように、聞き手を話題に巻き込み、聞き手の関与度を高めることにつながりうる。さらに、条件節で伝達される命題をどのようにとらえるかについて聞き手に選択の余地を残すことは、聞き手に対する配慮とも言え、話し手の押し付けがましさを軽減させる効果がある。これは間主観性の高まりに他ならない。この点を念頭に置きつつ、日本語「ば」の用法に戻ってみよう。

「聞き手に選択させる」という考え方は、(21)に見られるような提案の「ば」の発生をうまく説明してくれそうだ。

(21) a. (外出前に鏡の前であれこれと衣装合わせをしている娘に母親が助言して) スカーフでもしてみれば。

b. (相手の態度や振る舞いに腹を立てて) もう、勝手にすれば。

提案の「ば」はしばしば、疑問文と同じように上昇イントネーションで発話されることも、条件節と疑問文の関係の近さを表しているといえる。明示の後続節を与えられなかった聞き手は、会話の場における構成員として、何らかの反応を示すことが期待されていることを理解する。その反応とは言語的なものばかりでなく、非言語的・非音声的なものも含まれよう。たとえば(21a)において、母親の発話を聞いた娘が黙ってスカーフを首に巻くのも、一種の反応である。条件節と疑問文の類似点である「聞き手に選択させる」という特徴に加えて、「ば」の後続節が省略され、その部分の解釈を聞き手の推測にゆだねることも、話し手による断定を回避し、押し付けがましさを減らすことに一役かっていると考えられる。

本来は複数の節をつなぐ機能を持っていた接続助詞が後続節なしで使われた場合、聞き手に対する配慮や丁寧さが感じられるようになることは、日本語ではよく見られる現象である。Maynard (2005: 326) によれば、例えば「が」「けれども」「けど」などが後続節無しで使われた場合、以下のような機能を持ちうるという。

(22) a. providing information that is not helpful enough and being apologetic

about it

- b. making a statement that encourages the partner to continue with the topic
- c. responding with some doubt and uncertainty
- d. giving information in anticipation of the partner's response

上記機能のうち、命題内容に対する話し手の信念や確信度に関わる (22c) を除く残り 3 つの機能は明らかに、聞き手に対する配慮を表すものとなっているか、あるいはコミュニケーションの場において聞き手の果たす役割に話し手が期待していることを表している。具体例を以下にあげる。

(23) a. 申し訳ございません。課長は席をはずしておりますが。

b. 先生、ミーティングが始まりますけど。

— あ、すぐ行きます。

(Maynard 2005: 327-328)

また、(24) は話し手の信念や確信度に関わる (22c) の具体例とみなすことができるだろうが、この例とて、確信度が低いことを伝達することにより話し手による断定調が回避されているという点で、聞き手に対する配慮を感じとることができる。

(24) 次のステップとして、顧問弁護士に相談してみましようかねえ。

— どうかな。まだ、ちょっと時期的には早いと思うけれども。

本来、「ば」「が」「けど」等の使用においては、接続助詞の後に後続節が添えられるはずなのに、それが話し手によって供されていないということは、後続節に相当するものを補う役割は聞き手にゆだねられており、その意味において、話し手は聞き手の反応を待っているのだという間主観的解釈が成り立つ。ここで行われているのは、何一つ構成素の欠けることのない完成した文を話し手が聞き手に提示し、その完成した文に対して聞き手が推論を行うというようなことではない。聞き手は話し手の発話にもっと積極的に介入し、話し手・聞き手の双方が相手の心的状態をモニターしながら、共同作業的に会話を構築しているというほうがはるかに正鵠を得ている (cf. 本多 (2001))。

7. おわりに

本稿では接続助詞「ば」の発達を中心に考察を行った。節と節の接続に関わる文法化ではしばしば、parataxis > hypotaxis > subordination という、節間の統合度が增大する方向への変化が強調されてきた。しかし、「ば」の並列・対称用法や、後続節を伴わない「ば」の各用法など、節間の統合度の増大とは相容れない発達例もある。そのようなケースでは、とりわけ (間) 主観性の強化に解明のカギがあることを見た。

文法化における話し手による推論の重要性は、Traugott らによる一連の著作でも強調されてきたが (e. g. Traugott and Dasher (2002))、「話し手と聞き手の共同作業による文の構築」という、さらに一步踏み込んだ観点をとれば、接続機能から終助詞へという変化の流れには、聞き手による文構築貢献という、従来考えられてきたよりもずっと能動的な聞き手の役割を認めることができるのではないだろうか。コミュニケーションの場における話し手・聞き手のダイナミズムと (間) 主観化の相関関係について、さらなる研究が望まれるところである。

註

- 1 「あの先生ってば、かなりの変人だよ」に見られる「ってば」は、もともとは「と言えば」から転じた形である。
- 2 ただし Higashiizumi (2006) では、接続助詞化する以前の段階の「から」では、形式名詞としての独立性が薄れ、周囲の言語要素への依存度を高めていく様子も併せて報告されている。

使用文献

古事記 (日本古典文学全集 1, 小学館)、万葉集 (日本古典文学全集 6-9, 小学館)、伊勢物語 (『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』、日本古典文学全集 12, 小学館)、源氏物語 (日本古典文学全集 20-25, 小学館)、平家物語 (日本古典文学全集 45-46, 小学館)、風姿花伝 (『連歌論集・能楽論集・俳論集』、日本古典文学全集 88, 小学館)

* 万葉集は歌番号を挙げ、その他は頁数等を示した。

引用文献

- Abbot, Valerie and John B. Black. 1986. "Goal-Related Inferences in Comprehension," in James Galambos, Robert Abelson, and John Black (eds.) *Knowledge Structures*, 123-142, Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum.
- Chafe, Wallace. 1976. "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics and Point of View," in Charles Li (ed.) *Subject and Topic*, 25-56, New York: Academic Press.
- Claridge, Claudia. 2007. "Conditionals in Early Modern English Texts," in Ursula Lenker and Anneli Meurman-Solin (eds.) *Connectives in the History of English*, 229-254, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Cristofaro, Sonia. 2003. *Subordination*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Greenberg, Joseph. 1966. "Some Universals of Grammar, with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements," in Joseph Greenberg (ed.) *Universals of Language*, 73-113, Cambridge and Massachusetts: MIT Press.
- Haiman, John. 1978. "Conditionals are Topics," *Language* 54 (33): 564-589.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Herring, Susan C. 1991. "The Grammaticalization of Rhetorical Questions in Tamil," in Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization, Vol. I: Focus on Theoretical and Methodological Issues*, 253-284, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Higashiizumi, Yuko. 2006. *From a Subordinate Clause to an Independent Clause: A History of English because-clause and Japanese kara-clause*, Tokyo: Hituzi Shobo.
- Maynard, Senko K. 2005. *Expressive Japanese: A Reference Guide to Sharing Emotion and Empathy*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Ohuri, Toshio. 1994. "Diachrony of Clause Linkage: TE and BA in Old through Middle Japanese," in William Pagliuca (ed.) *Perspectives on Grammaticalization*, 135-149, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Ohuri, Toshio. 1998. "Polysemy and Paradigmatic Change in the Japanese Conditional Marker Ba," in Toshio Ohori (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*, 135-162, Tokyo: Kuroshio.
- Shibatani, Masayoshi. 1991. "Grammaticization of Topic into Subject," in Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization, Vol. II: Focus on Types of grammatical Markers*, 93-133, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. "On the Rise of Epistemic Meaning in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65 (1): 31-55.

- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 浅利 誠 2008.『日本語と日本思想』、東京：藤原書店。
- 本多 啓 2001.「文構築の相互作用行為性と文法化」、『認知言語学論考』1: 143-183.
- 森田良行 2002.『日本語文法の発想』、東京：ひつじ書房。
- 大堀壽夫 1996.「言語的知識としての構文—接続構造のパラメータ」、『認知科学』3 (3): 7-13.
- 竹内史郎 2007.「節の構造変化による接続助詞の形成」、青木博史 (編)『日本語の構造変化と文法化』 159-179, 東京：ひつじ書房。